

第58回

活力ある高齢化と地域活性化

―学生のSDGs視点から

行方市SDGs推進アドバイザー・茨城大学教授 野田 真里

「行方市SDGsフィールドワーク2025」を、茨城大学学生が私の指導の下、本年度も実施させていただきました。「活力ある高齢化と地域活性化」を主題とし、各テーマ別グループで調査を行いましたので、以下その概要についてご紹介させていただきます。

にするには、世界保健機関（WHO）が提唱する活力ある高齢化とその三要素である「健康」「参加」「安全」に注目する必要があります。

行方市は、農業を基幹産業として高齢農家も多いが、その中で農業協同組合の果たす役割は大きい。

まず「健康」については、全国厚生農業協同組合連合会による健康診断や、医療支援が行われている。次に「参加」については、高齢農家が新しい品種の栽培や海外輸出への挑戦、部会活動、文化・レクリエーション活動を通じて、社会的役割を果たしており、生きがい

を高め、また世代間のつながりを生みだしている。そして「安全」については、農業保険や安全講習、女性部による見守り活動が、高齢者や地域の安心を支えている。

（農業と活力ある高齢化）研究グループ

1. 活力ある高齢化の三要素（WHO）と農業

日本の地域社会は、急速な高齢化が進んでいる。こうした中で地域社会を持続可能で活力あるもの

2. 保護司活動における高齢者の地域貢献

保護司は、法務省から委嘱される非常勤の公務員として、地域に

おける犯罪予防や再犯防止に重要な役割を担っている。行方市では、高齢者が保護司として地域の安心・安全な暮らしに大きな貢献をしている。

保護観察対象者との継続的な信頼関係の構築は、再犯防止や地域の安全確保、住民への啓発活動に貢献している。また保護司活動は、高齢者にとっても重要な社会参加の機会となっており、対象者の更生や社会復帰への支援にやりがいや生きがいを感じている。

保護司は、地域のキーパーソンが多いが、高齢化が進む中、後継者の確保が課題である。保護司活動を高齢者の社会参加モデルとして位置づけ、さらに認知される仕組みづくりが重要である。

（犯罪予防・更生と活力ある高齢化）研究グループ

3. 高齢者等交通弱者を取り残さない持続可能な公共交通

高齢化が進む行方市において、免許返納者や高齢者等の交通弱者への移動手段の確保は、極めて重要である。公共交通が抱える課題としては鉄道駅が無く、住宅が広域に分散しているため、固定的な路線バスの整備が難しく、自動車依存度も高い。

行方市では、住民ニーズに対応した柔軟な交通サービスを提供し

ている。まず、デマンド型コミュニティバスは、医療機関や買い物目的の利用が多く、交通弱者を支える重要な役割を果たしている。AIによる配車最適化が導入され効率化が進むが、アプリの普及率や使いづらさ等に課題がある。次に、夜間送迎応援タクシーは、若者や子育て世代の移動に大いに寄与しているが、行政コストが高い等の課題が残る。

（公共交通と活力ある高齢化）研究グループ



▲「行方市SDGsフィールドワーク2025」茨城大学生と著者